−Light up your heart−

第75回“社会を明るくする運動”京都府作文コンテスト

入賞作文集

May you find your peaceful place！

主唱／法務省
MINISTRY OF JUSTICE

第７５回　京都府“社会を明るくする運動”
テーマ　　「Time with Hope―進む、希望とともに。」

がんばれるのは、どんなときだろう。
踏ん張れるのは、どんなときだろう。

自分を認めてくれるひと言。
肩をたたく手の温かさ。
遠くから見守るそのまなざし。

待っている人の存在に気づいたとき、
立ち直れると信じられる。

無数に生まれ、美しく漂うシャボン玉は、内側から生まれ出る希望、未来への期待感を表しているかのようです。

「人が変わっていく時間」、「自分が変わっていく時間」を信じて待つ営みの中に、更生保護の未来を共に描いていきたいと思います。

はじめに

法務省が主唱する〝社会を明るくする運動〟は、すべての国民が、犯罪や非行の防止と罪を犯した人たちの更生について理解を深め、それぞれの立場において力を合わせ、犯罪や非行のない明るい社会を築こうとする全国的な運動です。本運動は毎年七月を強調月間として全国で行われており、今回で七十五回目となりました。

この作文コンテストは、本運動の一環として、次代を担う全国の小中学生に、日常の家庭生活や学校生活の中で体験したことを基に、犯罪や非行などに関して考えたことや感じたことを作文に書くことで、本運動に対する理解を深めてもらうことを目的として第四十三回（平成五年）に始められたものであり、今回で三十三回目となります。

京都府でも、京都府知事を推進委員長とする京都府推進委員会において本旨に賛同し、毎年多くの小中学生の作品応募を受けて、うち優秀な作品を〝社会を明るくする運動〟中央推進委員会に推薦しています。

今回の作文コンテストには、京都府下全域から小学生の部六、五九四点、中学生の部五、二三四点、合計一一、八二八点の応募がありました。これらの作品について審査した結果、京都府推進委員会では小学生の部九点、中学生の部九点を入賞作品に決定し、京都府推進委員会委員長（京都府知事）賞、京都府教育委員会教育長賞、京都市教育長賞、京都新聞賞、ＫＢＳ京都賞、浄土真宗本願寺派更生保護事業協会会長賞、京都保護観察所長賞をそれぞれ贈ることといたしました。

この作文集は、これらの入賞作品を収録したものです。この作文集が一人でも多くの人に読まれ、児童・生徒の皆さんの思いが青少年の健全育成・非行防止に生かされるとともに、〝社会を明るくする運動〟に対する一層の御理解・御協力をいただければ幸いです。

なお、発行に際しましては、社会福祉法人京都府共同募金会の御配慮により共同募金助成事業の配分金を使用して作成されています。

おわりに、この作文コンテストの実施に当たり、御後援をいただいた機関・団体の皆様、また、多大な御尽力をいただいた学校関係者の皆様、賞をいただきました京都府教育委員会、京都市教育委員会、京都新聞社、ＫＢＳ京都、浄土真宗本願寺派更生保護事業協会に心から感謝を申し上げます。

令和七年十二月

〝社会を明るくする運動〟京都府推進委員会

目次

第七十五回〝社会を明るくする運動〟京都府作文コンテスト

〈小学生の部〉

〝社会を明るくする運動〟京都府推進委員会委員長（京都府知事）賞

対話がともす心の明かり　精華町立精華台小学校　六年　羽島　梨扇　4

どんな時でも心を繋げて　京都市立美豆小学校　六年　土田　杏　6

明るい未来を作ろう　木津川市立州見台小学校　六年　石塚陽奈子　8

京都府教育委員会教育長賞

非行防止教室で教わったこと　宮津市立府中小学校　五年　谷口　理奈　9

京都市教育長賞

認め、助け、高める　京都市立山階南小学校　六年　中島　和花　10

京都新聞賞

感情　宮津市立府中小学校　六年　服部　のえ　12

KBS京都賞

「小さな勇気で変えたこと」　京都市立正親小学校　六年　春日井いつき　14

浄土真宗本願寺派更生保護事業協会会長賞

頼ることの大切さ　京都市立桂坂小学校　六年　水口　侑大　15

京都保護観察所長賞

認めあう事の大切さ　京都市立朱雀第二小学校　六年　松井彩空乃　17

〈中学生の部〉

〝社会を明るくする運動〟京都府推進委員会委員長（京都府知事）賞

声をかけ手を差し伸べる大切さ　京都市立加茂川中学校　三年　杉　いおり　19

可能性の扉を開くたった一つの「機会」　木津川市立木津中学校　一年　津田　新大　21

信じてくれる人の温かい存在　福知山市立南陵中学校　二年　下司帆乃果　23

京都府教育委員会教育長賞

犯罪をなくすために　京丹後市立網野中学校　二年　井上　早優　25

京都市教育長賞

サポートの重要性　京都市立太秦中学校　一年　市野　佑樹　26

京都新聞賞

多文化社会から学ぶ「個性」の在り方　京都市立洛北中学校　三年　曽利　羽琉　28

KBS京都賞

関心を持ち続けること　京都市立下京中学校　一年　吉田　匡　30

浄土真宗本願寺派更生保護事業協会会長賞

「私たちの笑顔でつなぐ未来」　大谷中学校　二年　大嶋　良惟　32

京都保護観察所長賞

違いを認め合える社会に　京都市立四条中学校　三年　谷内　涼月　34

京都保護観察所 HP

京都府の社会を
明るくする運動 HP

京都府推進委員会委員長（京都府知事）賞

対話がともす心の明かり

精華町立精華台小学校　六年　羽島　梨扇

私は塾に行く時、一人でバスや電車などの交通機関を利用しています。数年前に引越してきましたが、前の学校で爆破予告事件、それに同調した別の犯人からの小学生殺傷予告事件があり、数週間に渡って親に送迎してもらい登校するという事がありました。私にとって、「犯罪」は被害者になるかもしれないという脅威を与えるものであり、常に不安をもって身近に感じながら生きてきました。

そして最近、私の利用している駅で、刃物を持った不審者のニュースが話題に上がりました。常に被害者にはならないように頭では考えていたものの、身近で実際に事件が起きると、大きなショックと衝撃を受けました。もし、自分が被害者になっていたらと考えると背筋が寒くなります。たとえ命が助かったとしても、そのことを一生忘れられず、心から笑えなくなるかもしれません。また自分ではなく大切な家族が被害に遭うようなことがあれば、普通の生活にもどることなんてできません。犯罪は、その人の物や命だけでなく、周りの人の幸せや生きる喜びまでもうばってしまうのです。

だから犯罪を未然に防ぐことは、とても重要だと思います。しかし、犯罪の原因は実に多様で、犯罪を犯してしまう人の根本的な原因を全て取り除いてあげることはできません。でも、身近な人を見守り、異変に気付いてあげること、そして手をさしのべることは、私たちにもできます。

私には手をさしのべてくれる家族や友達、先生がいます。困ったことや悩みがある時、私の様子に気付いて、

「どうしたの？大丈夫？」

「できることはある？」

と、声をかけてくれたり、話を聞いてくれたりする人がいます。そして間違ったり失敗したりしても励まし、受け入れてくれる人がいます。この小さな優しさや気づきこそが今社会に必要なのではないでしょうか。ある人が犯罪に手を染めてしまう前に誰かが話を聞くだけでも、安心感を与えられると思います。その人に寄りそい、励ましてあげられる、そんな気づかいのできる人になりたいし、そんな人であふれる社会であれば犯罪を減らせると思うのです。では、どうすればそのような優しさや気づかいを示せるでしょうか。

近年、バスや電車、飲食店など、場所を問わず、スマホに目を向けている人ばかりが目につくようになりました。また、ＳＮＳの普及によって、つながる世界も増え、同じ事に興味を持つ仲間を増やすことができる一方で、隣に座っている身近な人との会話はずいぶん減ってしまったと思います。ネット上でつながることは便利ではあるけれど、直接人と人とが話すことの大切さ、その重みを感じることこそ、今の私たちに求められていることなのだと私は思います。周りの人の顔を見て話したり、あいさつをしたりすることで、異変にも気付くことができ、

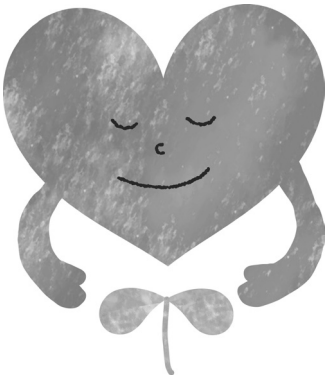
「大丈夫？」

などの声がけにつながります。そしてそれが誰かの心の支えになったり、自分は一人じゃない、という安心感を生んだりすると思うのです。一人一人の優しい心のこもった生の言葉が、人々の心に明かりをともし、社会を明るく導く一歩になると思います。

審査員からのメッセージ

作者が引っ越し前の学校で経験した爆破予告事件や、利用している駅で起こった事件から犯罪の被害者になってしまうかもしれない不安や、スマホが普及したことで会話が減ってしまった社会に対することなど、作者の経験や身の回りのことを通した考えが述べられ、最後の一文までの展開が流れるように進み、非常にまとまりがあり、読み手の心に響く作品でした。

特に題名「対話がともす心の明かり」は作品を一言で表すに相応しくよく考えられていると思いましたし、私たちはどうすれば良いかという部分まで深く考えられていると思いました。



京都府推進委員会委員長（京都府知事）賞

どんな時でも心を繋げて

京都市立美豆小学校　六年　土田　杏

私は、どんな時でも心を繋げることが大切だと思います。

ある日、私は友達に、

「ざこ、弱いな。」

と、いけないことを言ってしまいました。遊びに夢中でつい言ってしまったのです。すると友達は、

「そんなこと言わなくていいじゃん。」

と言い、帰ってしまいました。いつもわいわい遊んでいたはずが、次の日の学校では一言も話せないし、その友達に近づくこともできませんでした。次の日も、その次の日も。四日程経った頃、思い切って、

「前はごめん。」

と言ってみました。私はその時、友達がしばらく黙っていたので、これは許してもらえないな、また一歩も近づけない日々が続くのか、と友達の意見を聞かず、あきらめていました。でも、友達がやっと口を開いて、

「うーん、別にもう気にしてないし。」

と言いました。私は無理に言っているんだな、距離はとられるかなと思いました。

私は、今までいじめなどはやられた側の心にすごくキズが残ると聞いていました。しかし、私はやった側も心にキズが残ると思いました。その後もずっと友達のことでもやもやしていました。しかし、友達はいつもの生活のように私を遊びに誘ったり、たくさんしゃべったりしてくれました。私は友達に、

「私は悪いことしたのに、私と遊んでいていいの？」

と聞きました。すると、

「私だって、いけないことするし、いけないことも言うもん。」

と笑顔で言ってくれました。私は、嬉しくて涙がこぼれそうになりました。そして、いつもの生活を取り戻していきました。

私は、この経験を通して、友達にいけないことをされても、「心を繋げることを大切に」ということを、毎日自分に言い聞かせています。心を繋げるということは、お互い様という気持ちや寛容な心を一人一人がもつことだと思います。しかし、心にダメージが残るようなことをされて、許せないと思うし、それほどすぐに心を開いて繋がるということは無理だと思います。私だって無理です。しかし、ずっと許せないままでいても、やった側の人もやられた側の人も、心の中のもやもやが取れないままで、すっきりしないと思います。ほんの少しでもいいから寛容でいることで、心はもやもやせず、やった側はいつもの生活に戻り、心を入れ替えられるかもしれません。こういう時には、「お互い様」という言葉も大切になってくると思いました。

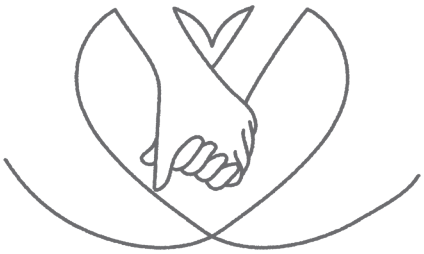
このように、誰かに許されるということは、とても大切だと思います。私は喧嘩をよくしますが、喧嘩したみんなは毎回許したり、許されたりしています。しかし、非行やいけないことをした人が皆、許される訳ではないかもしれません。犯した罪によっては、許せない人がとても多いと思います。しかし、悪いことをしたからといって、縁を切ったりするのではなく、心が一生繋がったままで過ごしていくと、今の社会が明るくなるのではないでしょうか。

私は、心を繋げるということを日々、大切にして過ごしています。貴方も、何か嫌なことをされたときは、無視をしたり、仕返しをしたりするのではなく、心を繋げてみてはどうでしょうか。

審査員からのメッセージ

最初に「どんな時でも心を繋げることが大切だと思います」という考えを端的に述べ、その後作者が友達に言ったインパクトのある言葉から始めたことで、非常に作品に引き込まれました。

友達に対して悪口を言った経験を通して、自身が感じたもやもや、意を決して謝り、許してくれた友達の言葉と込み上げてきた思いなど、その情景が思い浮かび、表現力豊かに書かれていたと思います。そしてこの経験を通して、犯罪や非行を起こした人に対してどうしたらよいかと深く考えられていました。



京都府推進委員会委員長（京都府知事）賞

明るい未来を作ろう

木津川市立州見台小学校　六年　石塚　陽奈子

みなさんは、自分の日常生活で社会を暗く感じる瞬間はありますか。例えば、事件等のニュースなどを見たときに、社会を暗く感じる事はありませんか。私はそういった事件等のニュースを見ると、社会を暗く感じることがあります。その他の例では、格差の拡大、将来への不安、人間関係のストレス、社会の不公平感などが挙げられます。私は、このような事をなくし、犯罪や非行のない未来にするにはどうすればいいのかを考えてみます。私は日常生活の中で、特にＳＮＳやニュースを見るときに社会の暗さを感じることがあります。たとえば、ＳＮＳ上で他人の失敗に対して、沢山の人が心ない言葉を投げかけているのを見た時です。内容によっては軽い冗談に見えるかもしれませんが、言われた本人にとっては深く傷つくことだと思います。私自身も、以前ＳＮＳで好きなキャラクターの感想を書いたときに、「センスがない」などの否定的な反応をもらったことがあります。たった一言でも、しばらく落ち込んでしまったことを覚えています。

また、ニュースでは、さまざまな非行や犯罪が報道されており、「なぜこんなことが起こるのだろう」や「何故防げなかったのだろう」と考えさせられることが多くあります。特に、子どもが被害にあった事件や、未成年が加害者になっている事件を知ると、私たちと同じ様な世代でも道を間違えてしまうことがあるという現実に、不安を感じることがあります。こうした報道を見ていると、社会は冷たく、他人を助ける余裕のない場所のようにも思えてしまうことがあります。

このようなことから、私が感じたのは、非行や犯罪は、ただ、「悪いことをする人がいる」から起きているのではないということです。もしかしたら、その人がずっと一人で悩みを抱えていたり、誰にも助けてもらえなかったりした結果、そうした行動に出てしまったのかもしれません。

つまり、非行や犯罪をなくすためには、まずその人が孤独にならないような社会をつくることが大切なのではないかと思いました。

では、私たちにできることは何か。

それは、小さな気づかいを忘れずに、周囲に目を向ける事だと私は、思います。たとえば、ＳＮＳでも悪口やからかいにのらないこと、困っている人に「大丈夫？」と声をかけること、人の気持ちを考えて言葉を選ぶことなど、日常の中でできることはたくさんあります。それぞれは小さな行動かもしれませんが、そうした優しさの積み重ねが、誰かを救い、非行や犯罪を防ぐことにつながるのではないかと私は考えます。

私は、たとえ小さなことでも、人を傷つけない言葉を選ぶこと、そして相手の気持ちを想像することを大切にしていきたいです。社会を明るくするには、まず身近な言動から見直すことが必要だと感じました。誰かを攻撃するのではなく、支えあえる関係が広がることで、少しでも非行や犯罪のない、安心できる社会になってほしいです。

みなさんがこのような事に気をつけて、一人一人がそれを意識することで、明るい未来へと変わっていくのだと思います。

審査員からのメッセージ

非行や犯罪を無くすための作者の考えが一貫して述べられ、自分たちに何ができるか深く考えられていました。

また、「社会を暗く感じる瞬間」の読者への問いかけから始まる構成は、内容に引き込まれていきましたし、さらに先に思考を進め、自分にできることが何かを考え、小さな気遣いや言葉選びなど優しい行動を積み重ねていくという具体的なことを考えられていたことも素晴らしかったと思いました。

京都府教育委員会教育長賞

非行防止教室で教わったこと

宮津市立府中小学校　五年　谷口　理奈

私は、非行防止教室で教えてもらったいじめについて考えました。いじめは、ダメなことです。いじめている人もいじめを知らんぷりしている人も、見て見ぬふりをしている人もいじめをしている人と同じになると聞いて、「それはそうだ。どうして助けてあげないの」と思いました。知らんぷりしている人は、その行動がいじめていることになるという感覚がないのだと思います。相手がその行動でも悲しい気持ちになっていることを知ってほしいです。一人ぼっちがつらいことを知ってほしいです。悲しいとき、だれも助けてくれる人がいないのは、本当につらいです。非行防止教室の話では、生きているのがつらいくらいになる人もいると教えてもらいました。

私は、転校をしたことがあります。友だちができるまでは、どきどきするし、一人ぼっちでつらいです。声をかけてくれる友だちがいたら、どんなにうれしい気持ちになるか。みんなに知ってもらいたいです。そばにいてくれるだけで、どんなに心強いか教えてあげたいです。

ここに転校してきたとき、できるだけ人にめいわくをかけないようにとしゃべらずに静かに過ごしていました。でも、それでは一人ぼっちのようでした。さみしい気持ちになっていたけど、そんな私のそばに友だちがきてくれました。特に何をしゃべるわけではないけど、一緒にいてくれるだけでほっとしました。そうするうちに遊ぶようになって、そして、毎日毎日一緒に遊びました。テストの点数が悪かったときには、

「次があるじゃん。」

と言ってはげましてくれました。友だちがいてくれることはとても心強いです。

人をいじめてしまう人も、きっと本当はさびしい気持ちがあるんじゃないかと思いました。きっと何か理由があるんだろうと思っています。自分から声をかけたり、何かを伝えたりしていったら、いじめてしまう人にも何か変化が起こるかもしれないなと思いました。

私は、絶対にいじめなんかしたくないし、されたくもないです。そして、いじめている人もいじめられている人も見たくないです。いつまでも友だちとなかよくしたいし、たくさん遊びたいです。心がすれちがって、なかよくできないときがあっても、声をかけて自分からおしゃべりしたいです。本当は、自分から声をかけるのは勇気がいるし、できそうにないと思ってしまうけど、校長先生が、「ちょっとの勇気を出してみよう。チャレンジしてみよう。」とおっしゃっていました。自分ができないことにチャレンジすることはいいことだと思うので、私はこのことにチャレンジしてみたいと思いました。今は、自分から声をかけるようにしています。私のチャレンジで、楽しい学校を創ることができたらうれしいです。みんなが楽しく勉強できる学校にしてみたいです。みんながやさしくて、笑顔がいっぱいの学校にしたいです。

非行防止教室の学習で、自分の新しいチャレンジを見付けた気がします。

審査員からのメッセージ

非行防止教室で学んだこと、考えたことがわかりやすく表現されています。経験を通して気づいた友だちへの感謝と、やさしく笑顔いっぱいの学校にしていきたい前向きな気持ちが伝わります。

京都市教育長賞

認め、助け、高める

京都市立山階南小学校　六年　中島　和花

私の父は、よくテレビでニュース番組を見ている。父につられて、私もニュース番組を見ていると、よく出てくるのは犯罪のことだ。犯罪を犯した人はもちろん逮捕されるし、逃げたとしたら、見つかるまで捜索されることになる。多額の罰金を払ったり、刑務所に入れられたりすることもある。ここで、私には疑問が生じた。「犯罪を犯す人は、なぜここまでもして犯罪を犯すのか。」という疑問だ。

私は、薬物犯罪について考えた。大麻などの薬物を使用すると一時的に頭がさえ、体がすっきりした状態になるらしい。でも、こういった薬物を利用すると、心身の健康に害があるということも分かった。私には、「なぜ、心身に良くない影響があるのに、『薬物を使いたい。』と思う人が現れるのか。」という新しい疑問が生まれた。

薬物のことをしらない人が、友達に、

「私、この薬物使ってるんだ。頭がさえて、すっきりするから、勉強にも集中できるんだよ。○○もやってみなよ。」

と言われたとする。頭がさえて、すっきりする。勉強にも集中できる。こう言われたら、きっと少しは薬物のことが気になると思う。しかも、友達が言っている。「私もやってみようかな。『やってみなよ。』って誘われているんだし、断ったら悪いかな。」と思うかもしれない。

ここで、三つの道が分かれる。一つの道は、誘惑に負けて、「一回試しにやってみよう。自分に合わなかったらやめることができるし。」と思って薬物を使い始めてしまう道。もう一つの道は、薬物のことを調べて、不安だったら、親や信頼できる人に相談してみて、「犯罪につながってしまうからやめよう。」と思い薬物を使い始めるのをやめる道。最後の道は、薬物を使い始めることはやめるし、友達にも、「やめたほうがいいよ。」と進める道。私は、薬物を勧められたなら誰もが、最後の道に進んでほしいと思う。「ちょっとならいいかな。」「試してみようかな。」「断ったら悪いかな。」などの考えは絶対にダメだ。

薬物犯罪だけでなく、全ての犯罪においてもこのことは通用すると思う。犯罪を犯してしまっている人は全員、先ほどの最初の道に進んでしまっている。

ここで考えてほしいことがある。一般的には、犯罪を犯した人は一生を台無しにしてそれで終わり、という考え方が多い。でも、私はそれは間違っていると思う。犯罪を犯すということは、もちろんよくないことだが、心から悔い改めて、「もう犯罪をしない。」と決心するなら、たとえ犯罪を犯したとしても、再スタートすることができると思う。

私の学年では、「認め愛」「助け愛」「高め愛」という言葉を大切にしている。お互いに「認め」「助け」「高める」。これには「愛」が関係しているという意味合いがある。これは、犯罪を犯してしまったけれど社会復帰した人とかかわるときにも通用すると思う。社会復帰した人を差別せずに「認め」、社会復帰した人が社会でやっていけるように「助け」、人格がより良くなっていくように、社会復帰した人を「高める」。これにはすべて「愛」が関係していると思う。私は、これから、犯罪を犯してしまったけれど社会復帰した人と関わる機会があるなら、「認め愛」「助け愛」「高め愛」のことを忘れずに関わろうと思う。

審査員からのメッセージ

日々発生する犯罪のニュースに触れ、罪を犯すと必ず処罰を受けることがわかっているのに、「なぜ、人は犯罪を起こすのか。」という疑問に出会われました。例えとして薬物と出会った際には、決して誘惑に負けない。親や信頼できる友人などに相談するなど、犯罪につながる甘い誘惑を断る方法を考えてくれました。ただ全ての人が断ることができるとは限りません。罪を犯してしまっても、立ち直る機会はあります。立ち直ろうとする機会を、周囲の人も受け入れることが大切で、誰もが立ち直れることが可能になる環境には、排除する考えではなく、「認め愛」「助け愛」「高め愛」の気持ちが必要だと訴えてくれています。この三つの「愛」があれば、罪を犯した人だけでなく全ての人が居心地よく、自らの目標に向かって進んでいけることができると思います。

京都新聞賞

感情

宮津市立府中小学校　六年　服部　のえ

私の地域には、「子ども安全見守り隊」という登下校の見守り活動をしてくださる方々がおられます。私たちの登校班は、その見守り隊さんの家の前を集合場所にしていて、みんなが集まるまで、家の前のベンチにこしをかけて待っていたり、一緒に話したりすることもあります。私が一年生のころからずっと毎日、登校のときに付いてあるいて来てくれていた見守り隊さんでした。

下校した後も一緒に話したり、私のお姉ちゃんや妹は、勉強を教えてもらったりしていました。夏休みのラジオ体操がない日には、一緒に散歩をしたりもしました。たくさん話をして、楽しかったな。たまにする散歩がうれしかったな。

以前、体を悪くされ見守り隊の活動を休んでおられる時期もあったそうです。でも、私が五年生のときに、また朝の集合の時だけですが、顔を出してくれるようになりました。

「おはよう。」

毎朝、にこっと笑って声をかけてくれました。

ところが、また体を悪くされ、今年、亡くなってしまいました。そのことを聞いた時には言葉が出ませんでした。そして、おどろきと悲しみがあふれるような、心に穴があくような、そんな感じになりました。

その見守り隊さんは、入院をされていましたが、私たちに会いたいという希望で退院をして来られたそうです。そのことを聞き、毎朝、縁側から部屋で寝ておられる見守り隊さんに、

「おはようございます！」

「行ってきます。」

と、みんなで声をかけてから登校していました。

すごく優しくて、私たちをよくほめてくれました。趣味のことで話をしたり、学校の様子を話したりもしてきました。そのことが、毎朝、私にとって心の支えになっていました。「よし。今日も一日がんばろう」と思わせてくれました。

亡くなったと聞いて、登校班のみんなと家族とで会いに行くことにしました。行く前に見守り隊さんあてに手紙を書きました。棺おけに入っておられるその方を見たとき、思い出があふれてきました。何も言えなくて、「ありがとうございました」と心の中でそっと強く言いました。悲しい気持ちでいっぱいだったけど、感謝の気持ちをどうしても伝えたかったです。

お葬式の日。式場に入って前を見ると、私たちとの思い出がたくさんかざってありました。もちろん、私たちだけではなく、その方のご家族との思い出もありました。いろんな思い出が動き出すような気持ちでした。私たちが、その方の回復を祈って折った千羽づるもかざられていてうれしかったです。最後まで私たちとの思い出を持っていてくれたことがうれしかったです。

「本当に、今までたくさんありがとうございました。たくさんほめてくれたり、話を聞いてくれたりしてとてもうれしかったです。今までおつかれ様でした。」

私は心の中でもう一度そう言いました。その方とはもう会えないけれど、きっと見守ってくれていると思います。そう思うと、がんばろうと思える気がします。きっと見守ってくれているから。

私の地域には、私たちを見守り励ましてくださる方々がおられます。登下校のときに、付きそって、一緒に話をする中に、心と心の通い合いがあります。私たちに温かい心を教えてくださっています。私は、この見守り隊さんとのことで、支えてもらっている地域の人たちとのことを考えるようになりました。

見守り隊さんとの出来事を通して、「感情」という二文字の本当

の意味が分かったように思いました。見守り隊さん、いつもありがとうございます。これからもよろしくお願いします。

審査員からのメッセージ

登下校を支えてくれた「見守り隊さん」の優しさと教えが、今も心の道しるべとなっている。温かな記憶が情景とともに綴られ、読む者の胸に静かに響く。

KBS京都賞

「小さな勇気で変えたこと」

京都市立正親小学校　六年　春日井　いつき

私はこれまでに、友達と何回もけんかをしたことがあります。最初はちょっとしたけんかでも、気づけばおたがいの声が大きくなり、最後には口もきかなくなってしまうこともありました。けんかの後はむねのおくがズンと重くなり、何をしても楽しくありません。それでも、自分から「ごめん。」とはなかなか言えませんでした。ある日、私はまたけんかをしてしまいました。理由は本当に小さなことでした。でも、その時は引くことができず強い口調で言い返してしまったのです。友達の顔がだんだんおこった表情に変わり、最後には背を向けて行ってしまいました。教室には気まずい空気が流れ、私は何も手をつけられなくなりました。次の日の朝。教室のドアの前で、私は深呼吸をしました。手のひらには汗がにじんで心臓もドキドキしていました。昨日のことを思い出すたびに、むねがキュッと苦しくなりました。ドアを開けると、友達はいつも通り席にすわり、机に向かってえん筆を走らせていました。その横顔を見たしゅん間足がピタリと止まりました。机の上の消しゴムが小さくゆれて、その音がやけに耳に残りました。「今、声をかけたらどうなるだろう…。」と、何度も頭の中で問いかけました。でも、もし冷たくされたらと思うと足が動きませんでした。教室のざわめきが遠く感じられ、まるで自分だけがそこに取り残されたようでした。それでも、昨日の帰り道に感じた重い気持ちを思い出しました。このままじゃ、ずっとむねのモヤモヤをかかえたままだ。そう思ったしゅん間、私は自分をおし出すように一歩ふみ出しました。

「昨日はごめん。」

自分でもおどろくほど小さい声でした。でも、その声はしっかり友達の耳に届きました。友達は手を止め、少し顔を上げて私を見ました。短いちんもくの後、ふっと笑って言いました。

「こっちこそごめん。」

と言ってもらえて、むねのつかえていたものがすっと消え、体がふわっと軽くなった気がしました。私は思わず笑い返し、いつものように楽しく話し始めました。この出来事を通して、一つ気が付いたことがありました。それは、けんかをしないことだけが仲の良さではないことです。ときには意見がぶつかってしまうこともあります。でも、その後の行動が大切なのです。自分から歩みよる勇気を持てば、友達との絆が強くなると感じました。

今、ニュースを見ると世界のあちこちで争いが起きています。国と国、人と人との意見がぶつかり、長い間仲直り出来ていない国もあります。もしも、相手の話を聞こうとしたり、自分から歩みよったりする人が少しでも増えれば、きっと争いは少なくなると思います。私が友達と仲直りできたように、自分の問題だけではなく、社会や世界の問題も、一人一人の小さな勇気から変わっていくはずです。私はこれからも、その勇気をわすれずに、周りを明るくできるように行動していきたいです。

審査員からのメッセージ

お友達とけんかしてしまってから仲直りのひとことを言いだせるまでの気まずい空気感や気持ちの動きをいろんな言葉でみずみずしく描き出すたぐいまれな表現力に驚きました。その出来事を世界中の争いごとにまで思いを巡らせているところも素晴らしいと思います。大人になればかえってできないかもしれない〝自分から歩み寄ってみる勇気〟を見習いたいと思いました。

浄土真宗本願寺派更生保護事業協会会長賞

頼ることの大切さ

京都市立桂坂小学校　六年　水口　侑大

　ぼくの最近あった出来事をお話しします。ある水曜日、五時間で学校が終わり、家が近い友達と帰ってきた時のことです。その友達にトラブルが起きました。家のかぎを家の中に忘れてきたのです。ぼくは、

「うちにおいでよ。」

と、言いましたが、友達は

「お父さんが帰ってくるかも……家の前で待っとく。」

と、言いました。それで、気になりながら、ぼくは家に帰りました。宿題を始めようとした時、ピンポーンとチャイムの音。ドアを開けると、友達が立っていました。友達は、

「うちのお父さんに連絡してくれない？」

と、言いました。ぼくのお父さんが、

「家に入って。」

と、言いました。そして、友達は家に入り、ぼくたち二人が塾に行く数分前に友達のお父さんがむかえにきました。いつもなら友達は「家の前で待つので大丈夫です。」と言っていたと思います。その時にぼくは思いました。「相手を頼ることが大事。」だと。友達はいつも、いろいろなことを自分でやる人だけど、自分の力ではどうすることもできない時は、相手を頼ることができる人でした。そんな友達は格好良かったと思います。

　そんなことを思いながら自分をふりかえると、よくないことが多く思い出されます。ぼくは、算数には自信がありました。自信があるということは、悪いことではなく、アスリートにとってはとても重要な言葉です。しかし、ぼくは自信があるがゆえに「分からない」ということを友達に言うことができず、困った顔をしていながら、クラスの友達が教えに来てくれると「分かる」とうそをついたことがあります。分からないことがはずかしくてしてしまった行動だったと思います。だからあの友達のように相手を頼ることができるのは、すごいことだと思います。六年生になった今でも、信頼できる母と父や塾の先生だけにしか聞いたり頼ったりすることができません。ですが、限られた人だけを頼るのは、人生損だと今では思っています。

　ぼくはこの経験から犯罪や非行がなぜ起こるのか考えました。犯罪や非行は決して許されることではありません。ではなぜ起こるのでしょうか。それは周りの人を信頼せず、「どうせ、誰も助けてくれない。」という思いこみだと思います。そういう感情をもっている人を助けるためには、どうしたらよいのでしょう。ぼくの考えでは、その思いこみをなくすために、一度、他の人を頼ってみてはどうでしょうか。頼ることの大切さを知っておけば、思いこみもなくなると思います。では、もうすでに犯罪を犯したり、非行に走ってしまった人達は、どうしたら二回目をしなくなるのでしょうか。その人が立ち直るには、何が必要で、どんなことをすることが大事なのでしょうか。ぼくは、たぶん、人を信じられないから頼ることができず、やってしまったと思います。だから、人を頼ることの大切さを教えることが大切だと思います。ですが、世の中には「自分だけを信じ、自分を頼っている」という人もいるでしょう。またぼくのように限られた人しか頼れないという人もいるでしょう。そんな人達は、少しずつ少しずつ、話したり頼ったりすることが大事です。たとえ一人でも二人でもいいから、少しずつ頼れる人を増やすことが大事です。そうすれば、次第に話したり頼ったりすることができる人が増えていくでしょう。その人達にきびしいことを言われても、相談することができます。そうすれば、自分でストレスや不満を抱え込まず、犯罪や非行に関わらずにすむでしょう。自分だけではな

く、別の誰かの世界観を知り、共有することができれば、社会は明るくなっていくとぼくは考えました。誰かを頼ることで、周りに迷惑をかけない方法で解決できると思います。

社会を明るくするために、ぼく達ができることは非行防止や犯罪防止のためにあいさつをすることなどいろいろあると思うけれど、一番大事なのは、周りの人を頼り自分ひとりで抱え込まないことだと思います。周りの人を頼ることで非行や犯罪を未然に防ぎ、社会が明るく楽しく生き生きとなることが何よりも大事だと思います。

審査員からのメッセージ

人に迷惑をかけないことや自己責任を問われる現代において、友人とのかかわりの中で「頼ること・頼られること」の尊さに気付いた小学生の視点に感銘を受けました。

京都保護観察所長賞

認めあう事の大切さ

京都市立朱雀第二小学校　六年　松井　彩空乃

社会を明るくするために私達は「個性を認め相手の事を理解する事」が大切だと考えます。

私は生まれつき「白斑」と「吃音」をもっています。白斑とは医学的には「尋常性白斑（じんじょうせいはくはん）」といい皮膚の一部の色が抜けて大小さまざまな白い斑点ができる病気です。皮膚の内側にはメラノサイトという色素細胞があり、紫外線を吸収するメラニン色素が何らかの原因でメラニン細胞が減ったり消失したりする事で発症します。次に吃音とは話す際に音や音節言葉が途切れたり繰り返したりする言語障害です。吃音症、小児期発症流暢障害とも呼ばれます。百人のうち約五～八人の発症率です。私の場合は、苦手な行の言葉を言わないといけない時や緊張や不安な時に出てしまう事が多いです。話はもどり白斑は治らない、治りにくい病気なので減る事がない非常に厄介な病気です。割合は最大で二％でものすごく高い率ですが、死に至る病気でないので、有効的な治療法がなく「酷な病気」と思う人も多いそうです。そんな二つの病気をもっていたがあまり気にしていませんでした。しかし、小学二年生になった時、なぜ知ったのかは今だに分かりませんが、話した事のないとなりのクラスの男の子二人に私の苦手な行、あ行、は行をいえと突然言われ言って吃音が出ると笑われるという事が数週間続き、白斑もバカにされました。でもだれにも相談できず、人と話す事が怖くなり目元を隠すため前髪をおろしマスクをしていましたが、がまんできなくなり先生に言って解決してもらいましたがやっぱり怖くて前髪をおろしマスクをしていました。でも小学三年生の後半ぐらいに出きた友達になんでそんなに顔をかくすのと聞かれ軽く説明すると、まるで白黒だった世界に色が付いていったような感覚になりました。その言葉は、「そんな事気にしなくっていいって！そんなの気にせず自信もと！せっかくかわいい顔してるんだから。それも個性だって！」と言ってくれました。その次の日、私にかわいいヘアピンをプレゼントしてくれました。それからヘアピンは宝物です。そしてその子は、心の暗闇のどん底に落ちた私を助けてくれて私よりも今ほしい言葉をしっていてびっくりしました。このように吃音などでなやんでいる人はたくさんいます。その子とは今も大切な友達です。これからも助け合いたいし、もしこまっていたりなどをしていたら、こんどは私がすくってあげたいなと思っています。小学三年生から少しでもスラスラ話せるように「言葉と聞こえの教室」にかよい始めました。そこには自分と同じ吃音をもった人がいました。少しは人前で話すのも平気になってきました。吃音は大人になるとなおる人もいれば、なおらない人もいます。白斑も治らない、治りにくいですがそれをせめずにそれも自分の個性だと認めて「認めてもらっていきたい」と思って自信をもてています。私の場合は、「吃音」も「白斑」も生まれつきもっています。しかし、ある日突然発症する時もあります。生まれつきではないときの原因は、吃音の場合、約四個あります。まず一つ目は、「体質的要因」。子ども自身が持っている吃音になりやすい体質の事です。舌や喉などの器官には問題なく「脳の機能と構造の違い」だと考えられています。二つ目は、「環境的要因」。さまざまな物があり明確には分かっていません。さまざまな環境的要因に本人の体質がからみあう事で発症します。三つ目は、「獲得性神経原性吃音」。脳の損傷にともなって発症します。後天性の脳損傷によるものです。脳血管障害での発症が多いとされているが、神経変性疾患、脳腫瘍、脳外傷などでも報告されています。最後の四つ目は、「獲得性心因性吃音」。心理的なストレスや、外傷体験が原因となって発症します。神経学的問題が見つからず、獲得性心因性吃音と診断された場合には発症となった心的外傷の影響などを精神

科医が診察するそうです。白斑は、複数の原因が関係しており、完全には解明されていません。しかし以下の原因が関与していると考えられています。「自己免疫の異常」や「遺伝的素因」「精神的ストレスや皮膚への刺激」です。この三つが主な原因だと考えられているそうです。

個性を「認める」「認めてもらえる」というのは病気や障害などを持っている人からすると、とても大きな救いになる事があります。もちろん孤独さや惨めさを感じる事もあります。でもその事を認めてくれて私は救われました。その子には約四年たった今でも感謝しています。私達は皆と違うからなどのどんな理由があろうと差別などを無くし、認めあう事でみんな笑顔で楽しく過ごせる「明るい社会」が出来上がっていくと思っています。

審査員からのメッセージ

ご自分の辛い経験を救ってくれた友達に感謝するとともに、そのときのことを忘れず、友達が困ったときがあれば今後は自分が救いたいとの想いに、相手を理解することで生まれる強い絆を感じました。

相手を認め大切にして認めることで、自分も大切にされて認められる。そんな絆が増えることで、たくさんの人と心がつながっていく。この積み重ねが明るい社会の実現につながる、そう感じました。

京都府推進委員会委員長（京都府知事）賞

声をかけ手を差し伸べる大切さ

京都市立加茂川中学校　三年　杉　いおり

「住むところがなかったから、犯罪をして少年院を家にするしかなかったのです。」

ある青年が言ったこの言葉に私は衝撃を受けた。彼は複雑な家庭環境で育ち、家族から虐待も受けていた。その環境から居場所を作るために、窃盗をして自ら少年院に入ったのだ。私は彼が少し微笑みながら優しく語る姿に、最初は「本当だろうか？」と疑った。犯罪や非行を起こした人はとても怖いイメージがあったが、彼はそのイメージとはむしろ真逆で穏やかで素直に質問への受け答えをしていたからだ。しかし、その様子をしばらく見ていると、彼の語りの中に彼の愛情に飢えた淋しさと、深くて大きな心の傷をひしひしと感じた。当時、今の私と同じくらいの年齢だった彼にはとても重く苦しい毎日だっただろう。自分ではどうする事もできない環境の中で私なら耐えられるだろうか。

私たちがよくニュースで見る犯罪も「優しい人だったのに。」とか「まさかあの人が。」などのインタビューをよく見る。最近のSNSのトラブルも、「え？こんなにかわいい高校生が、こんなにひどいアンチコメントするの？」とびっくりすることもある。こういった行動も彼らの置かれている環境や傷ついた思いからきていることが多い気がする。そうなるきっかけは案外身近にある小さなことの積み重ねだったりするのではないだろうか。

私の祖母の家では、様々な果実を植えて季節ごとの収穫を楽しんでいるが、数年前に畑の敷地にある杏の実がほとんどもぎ取られていることがあった。杏ジャムを作りたくて、収穫を楽しみにしており、祖母が私たちを連れて取りに行こうと思っていた矢先だった。それを聞いて私もがっかりしたが、その話を聞いた曾祖母が悲しそうに「何か理由があるのかもしれないけど、言ってくれたらいくらでもとらせてあげるのにね。一度こういうことをしてしまったら、罪悪感なく繰り返してしまうかもしれないね。」とぽつりと言った。そんな事があった数日後に、曾祖母は知らない女性が自宅前の小さな畑の作物を物色している所に遭遇した。「一言声をかけてくださったらおわけしますから。」と声をかけたら、女性は申し訳なさそうに深く礼をしてその場を立ち去ったそうだ。こちらから声をかけることで、彼女の犯罪にストップをかけることができた。もしかしたら、最初の青年もニュースに出る人たちも、盗もうとしたおばさんも、今の環境がそういう行動をさせてしまったのかもしれない。しかし、一時的な気の迷いだとしても、こういう行動は社会からはみ出してしまう原因になる。そんな負のループから声をかけて彼らを救い出し、受け止めて許すことも周囲ができる犯罪防止の小さな一歩かもしれない。彼らが非行や犯罪に走る小さなきっかけがそこにあるように、私たちの小さな声がけがきっかけで誰かを救い出すこともできるのではないだろうか。

学校生活でも同じようなことがあった。いつも絡んで嫌なことを言ったり、ありもしない噂を流したりする子がいた。最初はその行動が何故かよく分からなかったが、周りが呆れてほっておいたら、もっとエスカレートしてきた。その話をしたら母が言った。「その子は、きっと淋しいんだね。イライラやストレスを抱えて、それを抱えきれなくなって聞いてほしい！と心が叫んでいるんだよ。案外聞いてあげたらもうしないかも。」その時は正直「面倒くさいな。」とも思ったが、今は少し違った角度でその子のことを理解することができる自分がいる。

人はどんなに強くてもやはり一人では生きていけないのだ。誰かと関われば、時には自分と違う相手を理解し、お互いを理解しようとする努力も必要となる。そうすることでそこに自分の居場所を見

つけることもできるのかもしれない。

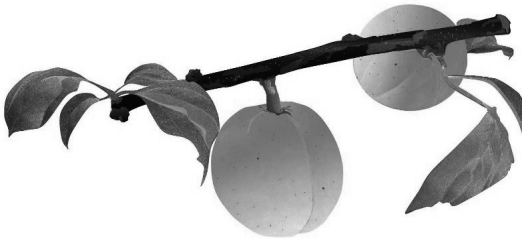
そして、人は人生の中で、大なり小なり数え切れない失敗を重ねる。しかし、それを失敗ととらえるのではなく、生きていくための通過点や出来事ととらえる事も必要なのだ。犯罪は悪いことだ。しかし、その裏には様々な事情も見え隠れする。何故そうしてしまったかをきちんと理解し、私たちが一緒に支えていくことが大切なのだ。一度失敗して、たとえ道を外れても、人生は何かのきっかけさえあれば、いつだって何度だってそこからまた新たな道を作れるのだから。

私自身も、これから色々な経験をして、その度に多くの失敗を重ね悩むこともあるだろう。そんな時は自分にできるベストを考え、ポジティブに物事をとらえて自分の道を進んでいきたい。そして、誰かの心にホッとできる居場所ができることを願って、私はこれからも沢山の人と関わりながら、迷わず声をかけ続け手を差し伸べていきたい。

審査員からのメッセージ

犯罪は悪いことだという前提に立ちつつ、周囲ができることや失敗をした時の心の持ち方など、作品を通して淀みなく作者の考えや思い、決意が述べられていました。また、窃盗をして自ら少年院に入った少年の言葉、畑に植えられた杏の実が盗まれた時の曾祖母の言葉、ありもしない噂を流す子に対する母の言葉など、様々な印象に残る「言葉」が随所に登場し、作品に引き込まれました。読み手自身にも「犯罪や非行のない社会づくりを進めていく上で自分に何ができるのか」を考えさせるような、訴える力のある作品だと思いました。

また、一文一文を推敲し、漢字をしっかり調べ、一文字一文字を丁寧に書き上げたことが伺え、作者の努力が伝わってきました。



京都府推進委員会委員長（京都府知事）賞

可能性の扉を開くたった一つの「機会」

木津川市立木津中学校　一年　津田　新大

「社会を明るくする運動」の目指している「立ち直りに寄りそい、犯罪や非行のない社会へ」は正直なところ、僕には少し遠い世界の話のように感じていた。ニュースで報じられる事件は、自分とは違う「誰か」が起こすものであり、僕たちの日常とは切り離された問題だと思っていた。大きな事件がニュースで報じられていても、僕は「また、あほな誰かがやらかしよった」としか思わなかった。しかし、一人のクラスメイトとの出会いが、その考えが浅はかな固定観念に過ぎなかったことを、強く教えてくれた。

小学生の時のクラスメイトだった彼は、授業中いつも窓の外をぼんやりと眺めているか、机に頭をふせていることが多かった。言葉遣いは少し乱暴で、提出物を忘れることもよくあった。小学校の簡単なテストでも結果はいつもほんとによくなかった。先生たちもどこかあきらめているような雰囲気があった。僕自身も、彼に対して勉強が嫌いで、やる気がないやつなんだなと決めつけていたように思う。

その彼と深く関わるようになったのは、席替えで隣同士になったことがきっかけだった。僕はそろばんを習っていて算数は得意だった。だから、算数の授業でいつもプリントをおわらせてしまって暇だった僕は彼に算数の計算の仕方を教えてあげた。その日から、僕たちの距離が少し縮まった。彼が分からなかったのは、図形や文章問題のような応用的な内容ではなく、割り算の仕方、分数の意味など彼がつまずいていたのは基礎の基礎だった。「こんなことも分からないのか。」一瞬そう思いかけた自分を恥ずかしく思った。僕が当たり前のように受けてきた教育、親や兄に勉強を教えてもらっていた事、分からない時すぐに質問できた環境、それらが、彼になかったのかもしれない。僕が持っていた当たり前は、決してすべての人のものではなかったのだ。

僕は教え方を変えた。難しい言葉を使うのをやめ、彼がどこで、なぜつまずいたのかを時間をかけて探し続けた。分数の割り算を教えるときは、僕は絵を描いて説明した。「ああ、逆数をかけるってそういうことか。」初めて心から納得したような声を出した彼の顔を、僕は忘れることができない。たった一つ、つまずいていた所が理解できただけなのに、彼はこれまでため込んでいた疑問を僕にぶつけ始めた。それから、あれほど嫌っていた勉強に、彼は少しずつ前向きに取り組むようになった。小テストで目標の点数を取れた日には、照れくさそうに笑ってくれた。その笑顔は、僕が知っていた彼のどの表情とも違って、自信と喜びにあふれていた。

一人の人間が、たった一つの機会によって、その可能性の扉を自分の手で開いていく瞬間を僕は見た。彼に足りなかったのは、能力や才能ではなかった。誰かに自分のレベルまで降りてきてもらい、時間をかけてつき合ってもらうという小さな機会だったのだ。

この経験は、僕の目を社会全体へと向けさせた。非行に走ってしまう子たちも、もしかしたら彼と同じなのではないだろうか。家庭の事情で誰も勉強をみてくれなかったり、学校で一度つまずいたまま誰にも助けを求められず、自分だけがおとっていると感じているのではないか。そう考えると、「社会を明るくする運動」がかかげる「立ち直り支援」の本質が見えてくる気がした。それは、罪を犯した人に罰を与えるだけで終わらせるのではなく、彼らがもう一度人生をやり直すための「学びの機会」や「人との信頼関係を築く機会」を提供することなのだと思う。そして、より根本的な「犯罪や非行の防止」とは、社会のすみずみまで、彼に訪れたような「機会」が行き渡る仕組みを作ることではないだろうか。

僕にできることは、まだ小さい。しかし、無力ではない。まずは、

自分の周りにいる友人に対して、先入観や決めつけをやめること。困っている様子の人がいれば、「どうしたの?」と声をかける勇気を持つこと。彼に教えたつもりが、本当に大切なことを教わったのは僕の方だった。

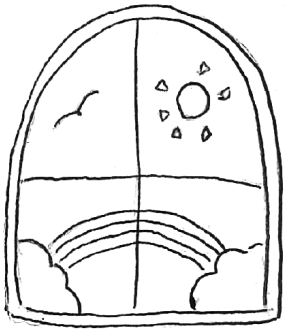
社会を明るくするとは、どこかの誰かがささげる大きなスローガンではない。僕や、みんなの一つの行動が、隣にいる誰かの可能性の扉を開く鍵になるかもしれない。その小さな鍵をあきらめず、根気強く多くの人が手渡し合っていくこと。その先にこそ、「犯罪や非行のない、誰もが輝ける社会」という光があると、僕は固く信じている。

審査員からのメッセージ

小学校時代のクラスメイトとのやり取りの描写が具体的で、作者が勉強を教えている光景や、心から納得したクラスメイトの表情が思い浮かんできました。飾らない言葉で表現されていて、とても親しみやすさを感じる作品でした。

作者はこの経験から、非行に走ったり罪を犯してしまう人の周囲にいる人の行動や環境が大切であることに気付き、そしてさらに一歩前に考えを進め、自分にできることは何かが述べられており、犯罪や非行のない社会をつくっていくことを深く考えた心の様子がうまく表現されていました。

本作品は、「京都府推進委員会委員長賞」とともに、全国表彰として「日本ＢＢＳ連盟会長賞」を受賞されました。おめでとうございます。



京都府推進委員会委員長（京都府知事）賞

信じてくれる人の温かい存在

福知山市立南陵中学校　二年　下司　帆乃果

　私はこの作文を書くにあたって、「一度失敗した人に、再犯を起こさせないためにできることはなんだろう？」という先生の質問について考えていました。反省している人でもなぜ、再犯してしまうのか。学習の中で私は、誰からも信じてもらえずに、社会から孤立していき、会社にも雇ってもらえず再犯せざるをえない状況に陥ってしまっていると知りました。反省しているのか信じられない、一度犯罪を犯してしまっている人はまたなにかするかもしれないという人々の不安と疑い。私ももし、「反省しました」、「改心しました」と言われても、すぐには受け入れられないし信じれないと思います。でも、そのなかで信じて受け入れてくれる人がいたら。社会復帰に向け支えてくれる人たちがいたら。再犯をせず、真っ当な人生がやり直せるのではないでしょうか。

「信じて、待って、私のために動いてくれる人がいたから」

　これは私の知り合いが不登校から立ち直れた理由です。

　今では楽しく高校生活をおくっている彼女ですが、彼女には中学の頃、いじめが原因で、不登校になった経験があります。そんな彼女は、どうして立ち直ることができたのか。まだ小さかった私はその場の好奇心で、彼女に尋ねました。

　すると彼女は、

「うーん」

と、少し考えたあと私の方を見て、

「母さんとか先生とかいろんないっぱいの人がずっと私のためにいろんな選択肢を探して、いろんな方法を試して、私が行動するのを待っててくれてた。それでも私が動けなくても、辛抱強く待ってくれた。離れていく人も無理だと言ってくる人ももちろんいたよ。でも、ずっと私のために何かしてくれていて、そんな自分を信じて動いてくれている人達のために自分も変わらなければならないと感じたんだよね。

　行かなくなった学校や習い事の席。いつ来るかもわからないのに私の席を空けておいてくれたの。ずっと信じて待っていてくれていたのかな。信じてくれていたんだと思う。そんな人たちがいたから、私は立ち直ることができたの。」

と昔を思い出しているような表情で少しうれしそうに答えてくれました。

　こんなキラキラした話は他の人からすると一見作り話のようなうまくいった話かもしれないけど、彼女からこの話を聞けて、人が信じて待っててくれる温かさってこんなに人を変えることができるのかと幼い私は当時、とても衝撃をうけ、感激したのをよく覚えています。

　私がもし、彼女の立場になって学校に行けなくなったと考えたら、自分が嫌になって、行けないことに苦しんで、一人孤独でずっと自分を責め続け、塞ぎ込んでいるんじゃないかと思います。想像しただけでも、気が重くなるようなそんな気持ちをずっと抱えて一人、真っ暗な世界でもう立ち直れないかもしれない。でもそんななか、母や先生、習い事の先生など、だれかが自分のことを信じてくれている、待ってくれている。そんな人の存在はとても大きく、希望の光となって照らしてくれると思います。そんな人達がいるから、人は前を向いて一歩踏み出していけるのではないでしょうか。

　それは、自分が犯してしまった罪を反省し、気持ちを改めた人にも同じようなことが言えると思います。

　反省した自分を信じてくれて受け入れてくれる、会社や家族。そんな信じて待っててくれる人がいるだけで、人は変わることができる。再犯をする人も少なくなると思います。

罪を犯してしまったことは許されることではない、許せない人もいるかもしれないけどここからまた、罪を犯すことがないように、同じ過ちを繰り返させないために、私たちはその人たちの気持ちを信じて、更生できる温かい社会を作っていくべきだと思います。

そんなふうに信じて受け入れる社会を作っていくことで、社会はきっと明るくなっていく。私はそう思います。

審査員からのメッセージ

「一度失敗した人に再犯を起こさせないためにできることは何か」について、作者が深く考えたことが表現されていました。特に作品の中心部分である不登校から立ち直った知り合いの話しについては、彼女の言葉が詳細に書かれていたことで、より深く読み手に響いたと思いますし、書き出しに「信じて、待って、私のために動いてくれる人がいたから」という彼女の言葉を持ってきたことで、より内容に引き込まれるようになったと思います。こうした、先に結論部分や要諦となる言葉を持ってくる手法が随所に見られ、読み手により伝わるよう、文章や構成が非常に練られていたと思います。

京都府教育委員会教育長賞

犯罪をなくすために

京丹後市立網野中学校　二年　井上　早優

最近の日本は殺人事件や強盗事件、放火事件の他にもいじめや殺人など、日本各地が犯罪のニュースであふれています。

私は、父の影響でよくニュースを見たり、新聞を読んだりします。朝はテレビでニュースと天気予報を見て学校にいく、これが私の家の朝のルーティーンです。ゾッとするような怖い事件もあれば、ほっこりするおめでたい報告もあります。そして、犯罪のニュースが流れてきた時に私はいつも、どうして人は犯罪を犯してしまうのだろうと思います。

どうして同じ人間なのに、その同じ人間を殺してしまうんだろうと思います。どうして暴力をふるうのだろうと思います。そして同時に、事件を起こしてしまった人の家族や友人はどんなことを思っているんだろうと思います。人が犯罪を犯してしまう理由は、寂しさや孤独感があるからだと私は考えます。なぜなら孤独感は他者との十分なつながりが足りず、寂しさ、虚しさ、疎外感、不安感など様々な感情を伴うからです。

では、孤独感を抱いている人を減らすにはどうすればよいのでしょうか。他者とのつながりが十分にあり、寂しい思いを感じさせない環境をつくればいいのです。しかしそれは、そんなに簡単なことではありません。だから家族との関係がすごく大切だと、私は思うのです。当たり前のように一緒に過ごしているけど、家族は信頼し合えて、理解してくれて、一番の味方になってくれる存在だからです。

私の両親は共働きで、いつも帰りが遅いです。私は、三人兄妹で兄と姉がいますが、歳が少し離れています。私が小学校高学年になった頃からは、「学校から帰ると家には私一人」が当たり前でした。他の友だちは家に帰っても兄弟がいたり、お父さんやお母さんがいたりして、とてもうらやましかったのを覚えています。でも、ある日突然兄が学校に行けなくなりました。父と母は、何とか学校に行かせようと毎日毎日ベッドから兄を引きずり起こしていました。それでも兄は学校に行けませんでした。だから、私が学校から家に帰ると兄がいる。私は小さい頃から兄が大好きだったので、すごく嬉しかったです。両親はすごく悩んだ数年だったと思うけれど、私はすごく楽しかった数年でした。そこで私は、家族が一人居るか居ないかでこんなに違うのかと、家族の存在の大きさに気づかされました。兄が学校に行けなくなる前は、寂しくてたまらなかったけど、兄が学校に行けなくなった後は、寂しいと感じたことは一度もありませんでした。今は、大学に進学して元気に過ごしている兄ですが、そんな兄のおかげで、「家族はかけがえのない存在だ」ということに改めて気づくことができました。兄には本当に感謝しています。

非行に走ってしまった人の周りにも、もし話を聞いてあげられる誰かがいたら、事件は起きなかったのではと思います。味方になってくれる家族や友人がいて、生活していける場所があると孤独を感じる人が減り、犯罪や非行が少なくなり、明るい社会が創られていくと思うのです。

審査員からのメッセージ

自分自身の問いをもとに、経験を振り返りながら、わかりやすく考えを表現されています。人と人とのつながりの大切さと家族への深い感謝が文章全体から伝わり、明るい社会への想いと希望にあふれています。

京都市教育長賞

サポートの重要性

京都市立太秦中学校　一年　市野　佑樹

私は、犯罪について考えたときに、最初に気になったのが罪を犯す理由についてです。

先日、父からショッピングセンターでお菓子を盗んだ少年を捕まえたと聞いたときに私は、お金で買えばいいのにと考えたからです。

窃盗の理由を父に聞くと、「自分がその物を欲しかったり、お金がなくて生活が苦しい人が窃盗をするのではないか。」と言っていました。

私は、窃盗する理由をインターネットを使って検索してみました。法務省の犯罪白書には、少年の窃盗の理由について「利欲」が六十六・六パーセント、「遊び」が二十六・八パーセントで「困窮・生活苦」はわずか〇・七パーセントと記載されていました。

このことから、犯罪者は自己統制のできない人が多いのではないかと私は考えました。

犯罪をなくすためには、一人一人が自分の感情や行動をしっかりとコントロールできるようになると、社会から犯罪者がいなくなるのではないかと思いました。

そして、実際に犯罪者は自己統制のできない人が多いのか、どのような犯罪が起こっているのかを知るために裁判所へ行って調べてみました。

この夏休みを利用して私は父と刑事裁判を二回、民事裁判を二回傍聴しました。その中でも特に窃盗事件が印象に残りました。

法廷には椅子があり、傍聴席から見て左に検察官、右には弁護士がいました。

しばらくして、弁護士側の奥のドアから二人の警察官に挟まれて被告人が入ってきました。

私は「うわっ」と声が出そうなくらい衝撃を受けました。被告人には手錠がついており、手錠は縄で縛られていて、警察官が縄を引っ張って被告人を連れていたからです。

その光景はまるでリードのついた首輪をした犬のようでした。

裁判官が法廷に来ると全員が礼をして裁判が始まりました。その裁判の内容は、ギャンブルをしたいがために自分の働いている会社の工具を盗み、売るというものでした。

私はこの裁判を見てこう思いました。

被告人は「自分勝手」だと。

自分のお金でギャンブルをすることは悪いことではないけれど、人の物を奪ってすることはいけません。

その被告人は、本当に次は窃盗をせずにいられるのか疑念が残りました。

そこで裁判所から帰宅した私は、日本の再犯者率をインターネットを使って調べました。

法務省の令和六年版再犯防止推進白書によると、令和五年の再犯者率は四十七・〇パーセントと記載されていました。四十七・〇パーセントとは、約二人に一人がまた、犯罪を犯すということです。つまり、一度犯罪をすると再度犯罪をする確率が高いということです。

また、その再犯防止白書には、就労・住居の確保等を通じた自立支援のための取組が記載されていました。

再び犯罪をさせないことも重要であると考えた私は、裁判を傍聴したときのことを思い出しました。

その裁判では、被告人を雇おうとする人がいたり、社会復帰を手伝おうとする家族がいたのです。犯罪を減らすためには、再び犯罪を犯さないことが重要であり、被告人をサポートする人がいると知りました。

そのような人たちがいると知った私は、次の三点について今後気

をつけようと考えました。

それは、「困った人を助ける。」「正直になり嘘をつかない。」「相手の気持ちを考えられる人になる。」という事です。

もし、犯罪を犯してしまった人がいたら、その人を責め立てるのではなく、サポートすることが大切なので、私自身が普段から困った人を助けようと思いました。

次に、もし悪いことをしてしまった時は、嘘をつかず、すぐに謝ります。嘘をつくと信用してもらえず、誰も助けてくれなくなります。だから、正直になり嘘をつかないことが大切です。

最後に、相手の気持ちを考えられる人になるということです。窃盗であれば、盗む前に被害者側の悲しみや苦しみを考えられる人であれば、きっと犯罪を犯すことはありません。

このように一人一人が自分勝手ではなく、相手の気持ちを考えられるようになれば、犯罪のない明るい社会にできると考えました。

私の周りに自分勝手でルールを守れない人はいないか、困っている人はいないか、犯罪に関わる可能性がある人を見逃さず、犯罪の予兆を感じとったら、周りの人みんなでサポートするんだという強い気持ちやコミュニティを作るよう日々心掛けていきたいと思います。

審査員からのメッセージ

お菓子を盗んだ少年が捕まった話を父親から聞き、罪を犯してしまう理由は何であるのか。作者に素朴な疑問が芽生えました。「犯罪白書」にある少年の窃盗の理由を調べ、罪を犯してしまう人は、自己統制ができない人が多いのではないか等、探求心が深まりました。さらに、夏休みには父親とともに裁判を傍聴した経験から、再犯防止のためには、罪を犯した人をサポートすることが大切であることに気づかれます。このような貴重な学びから、「困った人を助ける」「正直になり、嘘をつかない」「相手の気持ちを考えられる人になる」と決意され、より良く生きるための指針となっていくと思います。また、その陰には伴走されている父親の存在があり、親子の絆の強さや家庭の温かさを感じさせていただきました。犯罪のない明るい社会を創るために、人と人が支え合うことが重要であることを伝えてくれた素晴らしい作文です。

京都新聞賞

多文化社会から学ぶ「個性」の在り方

京都市立洛北中学校　三年　曽利　羽琉

「個性あふれる」「十人十色」。これらは、学級目標を決める時に毎年のように候補にあがる言葉です。人権学習や道徳の授業を通して「個人の価値を尊ぶこと」を学び、それは私たちの中で「大切なこと」として刻まれてきました。

しかし、現実の学校生活に目を向けると、クラスの中で異彩を放つ個性は、悪目立ちする存在としていじりの対象になったり、誰かの「好きなこと」や「努力してきたこと」が軽んじられ、からかわれたりしている場面を毎日のように目にします。では、そのような状態から脱却するにはどうしたらよいのでしょうか。私は、実際に友達がからかわれてつらい思いをしていると打ち明けてくれた時、「得意なことを誇示しないようにすることが、その状況から抜け出すための最善の方法ではないか」と伝えてしまいました。しかし、それは友達の個性を封じる方が良いと言っていることと等しく、私の言葉が本当は友達を最も深く傷つけてしまったのではないかと思うと、強い後悔と罪悪感で胸がいっぱいになりました。

さらに、この構図は決して学校という小さな社会に限定されるものではありません。「個性を大切に。」誰もがそう教わり、理解しているはずの社会で、SNS上の誹謗中傷や、ジェンダー差別など個性を卑下する言動が見られることに大きな矛盾を感じていました。

こんな日常の中で、私は「個性が共生できる社会を実現するなんて難しい」と思っていました。そんな考えを一変してくれたのが、ニュージーランドでの経験です。

去年の夏、私は二週間の短期留学でニュージーランドへ行きました。ニュージーランドには、先住民族であるマオリや、ヨーロッパ系、近年ではアジア系の人々も多く移住しています。私は現地の語学学校に通い、様々な国から来ている留学生と一緒に授業を受けました。先生方は、マオリの言葉や文化に誇りを持って教えてくれました。そして、それ以上に、先生自身が留学生それぞれの出身国の文化を学ぼうとしてくださる姿勢が印象的でした。「kiaora＝マオリ語でこんにちはの意」と挨拶すると、「こんにちは！」と日本語で返してくれる。そこでは「異なるもの」を排除する雰囲気はなく、むしろ「違うからこそ面白い」「知りたい」と誰もが思っているようでした。そこでの「違い」は分断の種ではなく、学びや喜びの源として受け止められていたのです。

ニュージーランドの先生の「他者の違いを価値として捉える姿勢」に皆が感化され、様々な国の留学生一人ひとりが、互いをもっと知りたいと思い過ごした二週間。こんなに短い時間であっても、互いの個性をわかり合うことができるという体験は、私にとって初めてのことでした。一人ひとり違った個性があり、その個性がその人自身の魅力として輝いている「個性が共生できる社会」が実在することを知りました。

一方で、ニュージーランドと同じように様々な国からの移民を受け入れているアメリカでは、今でも差別が社会問題となっています。この根底には、移民に「アメリカ人らしくなること」を求めたという歴史があります。「同化」を求められた人々は、結果として自国文化を失い、同時に完全には同化しきれない居場所のなさを感じるようになります。そして、全員を同化させようとする社会では、少しの違いが大きく見え、差別を増幅することにつながってしまっていたのです。

同化を求めるアメリカと、違いを価値と捉えるニュージーランド。そんなニュージーランドでも移民への偏見などはあると聞きます。

しかし、小学校の間から、マオリの文化やアジア系文化を取り入れた教育などを通して、偏見を減らそうとする取り組みがされてい

ます。私が経験した「違いを尊重する姿勢」はその努力の一端といえるでしょう。

振り返ると、私が友達にかけてしまったのは、まさに「同化を求める」言葉だったと思います。そして、アメリカの歴史が示唆するように、その先にあるものは、その人の居場所を奪うような深刻な差別なのだと気づき、愕然としました。

「周りの目なんて気にせずに、自分の個性を大切にしてほしい。」稀有な個性を決して目立たないようにするのではなく、一つ一つの個性が輝けるようにするために、まずは私自身が、友達の個性を価値あるものとして大切にしていきたいと思います。実際に私がニュージーランドで感じたように、自分の個性を認めてもらえることの喜びは、他者の個性を知ろうとする原動力につながっていく。だからこそ、私から変わることで、きっと一人ひとりの個性が輝く彩り豊かな明るい社会はつくることができる。今はそう思えています。

審査員からのメッセージ

留学体験を通して個性と共生の在り方を見つめ直す。「同じように振る舞う」ことで失われる自分らしさに気づき、共に生きる社会を真摯に模索する作文。

KBS京都賞

関心を持ち続けること

京都市立下京中学校　一年　吉田　匡

僕の住んでいる町内は、つながりが強く、集まる行事が多くあります。小学校を対象にした町内イベントだけで年に四回以上あり、マンションに住んでいても、張り紙で知らせがあって、中でもお地蔵盆では、町内の道路に大人が立って下さって、車に注意しながら水着に着替えなければならないほど派手な水鉄砲大会をしたりします。そんなおかげで、ほぼ町内の人達の顔は知っているし、毎日挨拶をしたり、話したりします。

『社会を明るくする運動』とは、どういうことか。小学生の頃にも考えた機会があり、当時の僕は、正直、始めピンとこず、しばらく悩んで、このテーマについて家族で話をしました。いくつも項目が出てきました。笑顔で挨拶をする、相手のことを気づかう、差別をしない、いじめない、認め合うなど、様々な場面を想像しながら考えました。僕は、もっと、規模の大きな動きのことだと捉えていましたが、小さなことからで良いのか。と気づいた覚えがあります。そして、僕が、始めにピンとこなかったのは、〝僕が、住んでいる町内、地域や学校、環境の中で、完璧ではなくても習慣になっていたり、優しい気持ちがあって、それが当たり前に出来ているので、なかなか気づかなかった。〟ということに、自分で気がつきました。非行や犯罪なども、感じたり接することも無く、自分は恵まれた環境にいるんだと確認したタイミングでした。

中学生になり、この作文でもう一度向き合う機会が出来て、〝犯罪や非行のない地域社会の実現について〟に重きを置いて考え直しました。やはりニュースで様々な事件を見ると、その事件や犯人の背景まで深く理解出来ず、何でこんなことしはったんやろ。考え方物事の捉え方が違いすぎる人たちで、分かり合えない気がする。怖い、関わりたく無い、バリアを張りたい。正直、そんな思いになりますが、知らなければ何も解決出来ないので、気持ちがあまり進まないまま、少年院で更生しようとされている方々の動画などを見ていきました。

自分が犯したことについて考え、反省しながら、インタビューで出てきた言葉は、信頼関係、人間関係が希薄で頼る人がいなかった、気付いてもらえなかった寂しさ、人から大事にされる、人を大事にするということすらが分からないなど。そんな思いが根っこからどんどん出て来る少年達。やはり、お節介でもうっとうしくても、人と人との繋がりがどれだけ重要なのかを考えさせられました。

僕の経験を通じて言えること。もう一度自分の町内のことを思い、気付いたことは、町内や地域での挨拶や声かけなど、まず『コミュニケーションを取るということ』は、『相手に関心を持っている』ことの表れなのだということです。それも親、家族とは違う、もう少し外側の、いい距離感からの〝関心〟です。

マザー・テレサの言葉の愛の反対は憎しみではなく〝無関心〟であるとされる様に、『何もしないこと』が、じわじわと孤立を深めたり、問題や不正に気づいていたとしても、解決されないまま放置されて、事態が悪化する原因になります。そして結果的に不正を助長して、それが大きな塊になって社会全体の不健全さがふくらんでしまいます。

人に〝関心〟を持って生活していくだけで明るく、社会は変わるのです。小さな〝関心〟が集まって、地域の目になり、犯罪や非行を生む手前のブレーキになり、防ぐことにつながるのではないかと思います。そう思うので、僕は明日からも会釈して、挨拶して、世間話を町内のおばちゃんと喋っていくのです。

審査員からのメッセージ

「社会を明るくする運動」とは?と疑問に思ったことを放置しないで悩みながら考え続け、家族で話し合ったり、地域の人々との関わりを見つめ直したり、動画を見て勉強したり、学び続けようとする姿に感心しました。地域のつながりがどんどん希薄になる今だからこそ、地域の皆がお互いに関心を持ち、きちんとコミュニケーションをとることが社会を明るくするために本当に大事なことだと考えさせられました。

浄土真宗本願寺派更生保護事業協会会長賞

「私たちの笑顔でつなぐ未来」

大谷中学校　二年　大嶋　良惟

私が住む町には、いつも誰かの「ありがとう」があふれています。朝、登校する道で近所の人に「おはようございます」と声をかけると、にっこり笑って「おはよう」と返してくれます。どんな時でもその一言に元気をもらうことができます。こうした小さなやりとりが積み重なることで、町全体が明るくなるのだと思います。

中学二年生になって、私は友達との関係に少しずつ変化を感じるようになりました。以前はただ楽しく話していた幼馴染が、いつの間にか悩みや気持ちを伝え合う仲となっていました。ある日、久しぶりに友達のAさんと会った時、彼はどことなく元気が無いように思いました。そのことを尋ねると、Aさんはしばらくしてから語り始めました。彼は、友達との距離を感じることが多くなり、悩んでいたそうです。私はただうなずきながら話を聞き、最初に「話してくれてありがとう」と伝えました。Aさんが笑ってくれたとき、心が温かくなったのを覚えています。

逆に、私が成績のことで悩んでいたとき、友達が気づいて声をかけてくれたこともありました。「勉強無理してない?」と優しく言ってくれたその言葉は、今でも心に響いています。この時初めて、自分の気持ちに正直になることの大切さを理解した気がしました。

去年の秋、地域のボランティアに参加しました。公園や通学路に落ちている空き缶やビニール袋をトングとごみ袋を使って拾っていく活動です。最初は正直面倒くさいなと思っていたのですが、同じ班で活動していた小学生の子が「お兄ちゃん、ありがとう」と声をかけてくれたとき、何故か胸がじんと熱くなりました。小さな行動だとしても、誰かのためになるのだと実感できました。

この経験をきっかけに、私は毎日学校で掃除を手伝うようになりました。教室の周りを掃き、黒板を拭くと、学校が少しずつ綺麗になっていくのが分かります。誰かのために時間を使うとは、自分の心を磨くことでもあると実感しました。最近では、「気持ちよく学校生活を送ってもらいたい」という思いが自分の中で育つのが分かるようになりました。

さらに、私は家でも掃除をするようになりました。帰宅後、玄関のたたきや台所の周りを拭いたり、ダイニングルームを整えたりすることを習慣にしています。最初は母も驚いていましたが、最近は「助かるよ」と自然に受け入れてくれるようになりました。また、妹が学校から帰って来たときに、さっと机の上を片付けると、勉強に集中できると言ってくれました。このたった数分の行動が、空気を和ませてくれることを知り、誇らしい気持ちが芽生えました。こうした日々の積み重ねが、私にとっては大切な習慣のように思えます。

また、再びボランティアに参加したときに出会った保護者の方や地域の人たちと言葉を交わすことで、自分の視野が広がった気がします。色々な人と話すことで、面白い話をたくさん聞くことができました。自分がこの活動に参加することで、新たに何かを見つけることができるのは嬉しいことでした。

今できるのが小さな活動でも、続けることで周りの人に良い影響を与えられると思います。学校や地域は、一人一人の行動で変わるものです。たとえ小さな力でも、誰かを笑顔にできる。それが私の原動力となっています。

私は、私たちが行っている小さな取り組みが、周りにも伝わっていくことを願っています。言葉で強制するのではなく、日々の行いで誰かの心を動かしたいのです。朝の挨拶から、夕方にする掃除まで、私たちの努力が町全体を明るくできると信じています。

そして、いつか私たちの町が、誰にとっても安心できる温かな場

所になることを願っています。未来を明るくするのは特別な人ではなく、一人一人の優しさと行動です。その一歩を、今日から、踏み出していきましょう。

審査員からのメッセージ

笑顔が笑顔を生む地域での体験を通して、「未来を明るくするのは特別な人ではなく、一人ひとりの優しさと行動だ」と、私に呼びかけてくれました。

京都保護観察所長賞

違いを認め合える社会に

京都市立四条中学校　三年　谷内　涼月

人は誰一人として、全く同じではない。性格、考え方、育ってきた環境、得意なことや苦手なこと、外見や話し方など人間は、それぞれ異なる特徴を持っている。だからこそ世界は面白いのだと思う。しかし現実には、その「違い」が原因でいじめや差別が起きたり、仲間外れにされたりすることも少なくない。

今の世界は身近なところに外国のルーツを持つ人がいる。私もその一人で、日本と、アジアの国にルーツを持っている。六歳のときに日本へ移住し、小学校に通っていたが、初めは日本語に馴染むことができずにいた。熱心に日本語を学んで、すぐにみんなと大差なく話すようになったが、もともと話していた言葉を忘れてしまった。そのまま中学生になり、新しい友達ができた。その友達に、実は外国にルーツを持っているということを言ってみた。すると、一部の友達は、その国の言葉を話せないのかと残念そうにしていて、私は少し悲しくなった。今も、ふざけて○○人と呼ばれることがあり、煩わしく思っている。しかし他の友達は、国際的な家庭でうらやましいなどと言ってくれた。うれしくなった私は、もっとその国の文化を大切にしようと思い、忘れてしまったその国の言葉をもう一度学び直すようになった。その姿を見て、親も喜んでよく様々なことを教えてくれた。そうして私は、「違い」を尊重し合うことで、悩んでいる人が減り、みんなで楽しく生活できる、つまり、「違い」は壁ではなく、世界を広げるための扉なのだと気づいた。

現代の日本社会では、少数派の人たちが生きづらさを感じる場面が多く存在する。外国にルーツを持つ人、体に不自由のある人、ＬＧＢＴＱ＋の人、家庭の事情で悩んでいる人など、多様な背景を持つ人たちが無意識の偏見や差別的な言動によって傷つけられてしまうことがある。しかし、私たちの一人ひとりが「違い」を理解しようとする姿勢を持つことができれば、社会は確実に今よりもやさしくて明るいものへと変わっていけると私は信じている。

私たちにできることは、けっして大きなことばかりではない。困っている人に声をかけてみる。誰かのちょっとした違いをからかわずに受け入れる。「それは違う」と感じたとしても、まずは相手の話に耳を傾けてみる。そのような日常の中での小さな行動が、少しずつ社会を変えていくための力となるのではないだろうか。

「違いを認め合える社会」とは、ただ我慢して受け入れる社会ではない。相手の立場や背景を知ろうとしながら、その中に存在している価値を見出していく社会である。誰かの「違い」を理解しようとすることは、自分自身の視野を広げることにつながる。そして、その人との関係の中で、自分自身も「自分らしくいてもよい」と思えるようになるのではないだろうか。人は一人では生きていくことが不可能である。支え合うことによってこそ、安心して暮らせる社会が生まれるのだと私は考える。

これからの社会を担っていくのは、私たち若い世代である。学校、家庭、地域など、身近な場所から「違い」を大切にし、認め合う行動を始めることが、社会全体を明るくする第一歩であると考える。私は、まず自分の身の回りの人に思いやりをもって接し、その人の「違い」を見つけたい。また、困っているのであれば、自分にできることから少しずつ行動していきたい。そして、すべての人が自分らしく笑顔でいられる、そんな社会を目指して、これからも前向きに歩んでいくつもりである。皆さんも、社会を明るくするために、違いを認め合える社会を作るために、何かできることを考えてみてはいかがだろうか。

審査員からのメッセージ

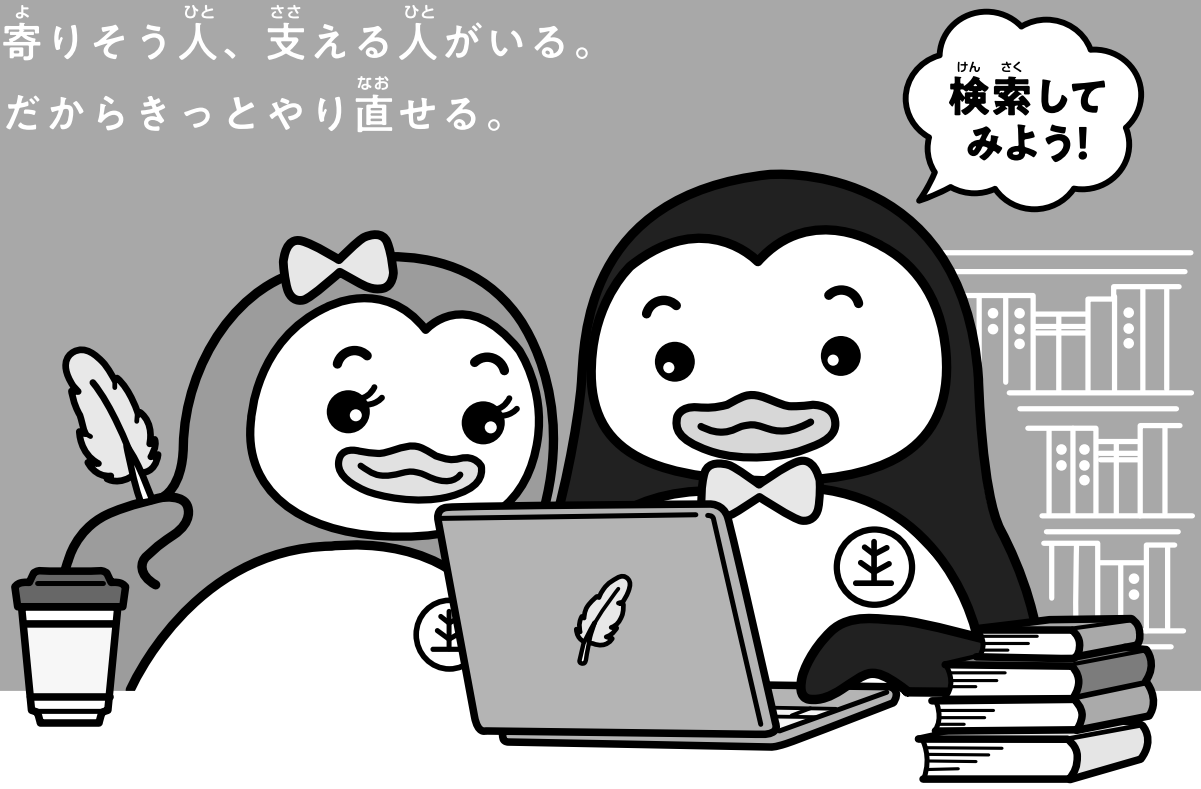
違いがある相手は自分にないものをもっている、互いにその違いを尊重しあうことでみんなが楽しく生活できる社会になる、誰かの違いを理解することは自分自身の視野を広げるといった想いに強く共感を覚えました。

違いを認め、相手の立場や背景を知ろうとすることで、その中に存在する価値、すなわち相手の大切さや素晴らしさに気づくことができるでしょう。お互いを尊重することができる社会はきっとやさしくて明るいものになる、改めてそう思いました。

法務省
MINISTRY OF JUSTICE

優しさは、人を少し強くする

寄りそう人、支える人がいる。
だからきっとやり直せる。



インターネットで調べてみよう!

"社会を明るくする運動"って?

ホゴちゃんとサラちゃんのお部屋

"社会を明るくする運動"作文コンテスト

小・中学生のみなさんが犯罪や非行などについて考え、書いた作文を募集しています!

詳しくはこちら ➡ 社会を明るくする運動作文コンテスト

社明　しゃめい

社会を明るくする運動

犯罪や非行を防止し、立ち直りを支える地域のチカラ

“社会を明るくする運動” 京都府推進委員会

「更生保護（こうせいほご）」ってなんだろう？

その後、ホゴちゃんは立ち直ろうとしている人を温かく見守る心優しいペンギンになりました。
いつも、犯罪や非行のない明るい社会を願って活動しています。

「幸福（しあわせ）の黄色い羽根」は、犯罪や非行のない幸福で明るい社会を願うシンボルです。

更生ペンギンのサラちゃん

地域のチカラで立ち直りを支える更生保護

“社会を明るくする運動”
京都府推進委員会マスコットキャラクター

名前：京の社明（きょうのしゃめい）くん
性別：男の子
役割：京都府内で社会を明るくする運動のPR
性格：明るくおおらか。人とのふれあいを大切にする。

第75回“社会を明るくする運動”京都府作文コンテスト
入　賞　作　文　集

令和７年12月発行

編　集　第75回“社会を明るくする運動”京都府推進委員会事務局
〒602-0032　京都市上京区烏丸通今出川上る岡松町255番地の４
京都保護観察所　振興班（電話075-441-5141）
URL：kyoto-kouseihogo.com

製　作　株式会社 北斗プリント社

“社会を明るくする運動”京都府推進委員会事務局に
無断での転載はしないでください。

犯罪や非行のない社会づくりに関係する人と組織

保護観察官

犯罪や非行をした人の再犯・再非行を防止し、医学、心理学、教育学、社会学などの専門知識に基づいて、社会復帰のための指導や援助を行う国家公務員です。また、犯罪の被害にあわれた方の相談や支援も行っています。

保護司

保護観察官と協働して、犯罪や非行をした人の立ち直りを地域で支える民間のボランティアです。法務大臣から委嘱された非常勤の国家公務員として、更生保護活動全般に携わります。

更生保護女性会

女性ならではの視点で、犯罪や非行をした人の立ち直りを支えるボランティア組織です。青少年の健全育成や子育て支援などの多彩な活動を地域で展開しています。

BBS会

“Big Brothers and Sisters Movement”
非行少年たちと一緒に悩み、学び、成長や自立を支援する「ともだち活動」のほか、非行防止活動や学習支援など様々な活動を行う青年ボランティア団体です。

更生保護施設

犯罪や非行をした人の社会復帰に向けて、一定期間、宿泊場所や食事を提供し、生活の指導や支援を行う民間の施設です。

更生保護協会

犯罪や非行のない明るい社会づくりのため、寄付を募り、犯罪・非行防止のための広報や援助を行うなど、更生保護ボランティア活動を援助しています。

協力雇用主

非行や犯罪をした人に働く場を提供し、その立ち直りに協力する事業者です。

もっと知りたい人はホームページへ

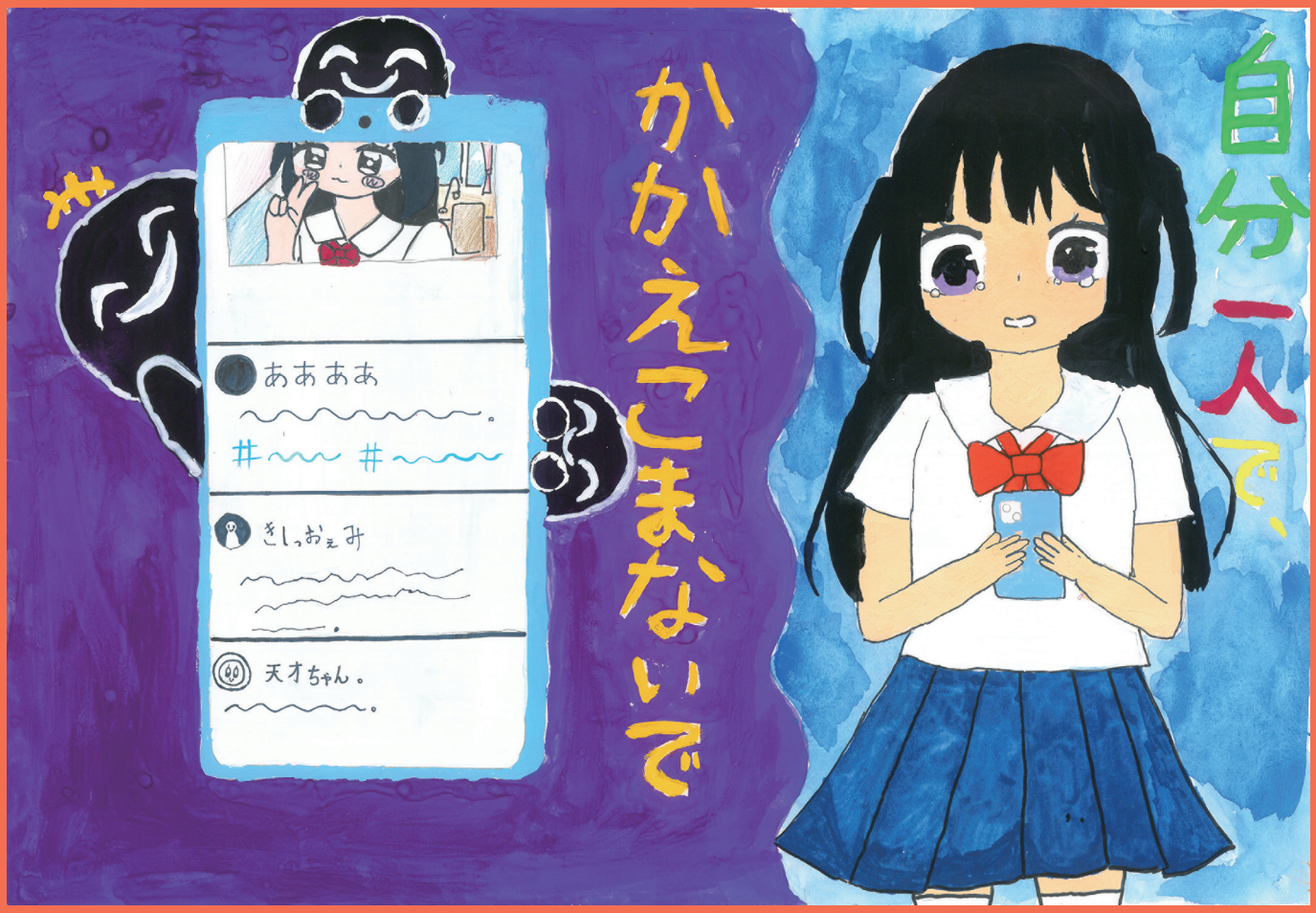
法務省　http://www.moj.go.jp

更生保護ネットワーク　http://www.kouseihogo-net.jp

社会を明るくする運動
ウェブサイト

ホゴサラのお部屋
（きっずるーむ）

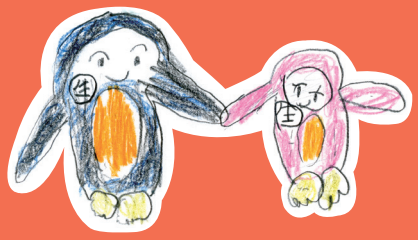
社明サイト
作文コンテストページ



京都市立下京中学校美術部　生徒さんの作品

京都市立北総合支援学校　生徒さんの作品

第75回“社会を明るくする運動”京都府推進委員会
更生保護法人　京都府更生保護協会
法務省　京都保護観察所　振興班　TEL 075-441-5141



募金をありがとう
赤い羽根共同募金

この作文集には、共同募金助成事業の配分金が使われています。